継承困難でも「続ける」

珠洲・田中家「あえのこと」へ決意

国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録されている奥能登地方の農耕儀礼「あえのこと」。珠洲市若山町の田中家では、昔ながらのしきたりを守り継承しているが、簡素化したり、あえのことそのものを行わなくなった農家も多い。少子高齢化の中、大切な文化をどう残していくかが問われている。（近江士郎）

昨年十二月五日、田中家では四代目当主の団体職員田中茂好さん（六四）が、裃（かみしも）姿で田の神様をもてなした。田中家では、先代の牛雄さんが守り続けてきたが昨年三月に九十二歳で他界した。茂好さんは牛雄さんの足腰が弱ってきたため、二〇一〇年十二月から、あえのことの主人役を務めてきたが、かたわらにはいつも牛雄さんが見守っていた。茂好さんは「父から、あそこが違うと言われたこともある。寂しさを感じる」と打ち明ける。

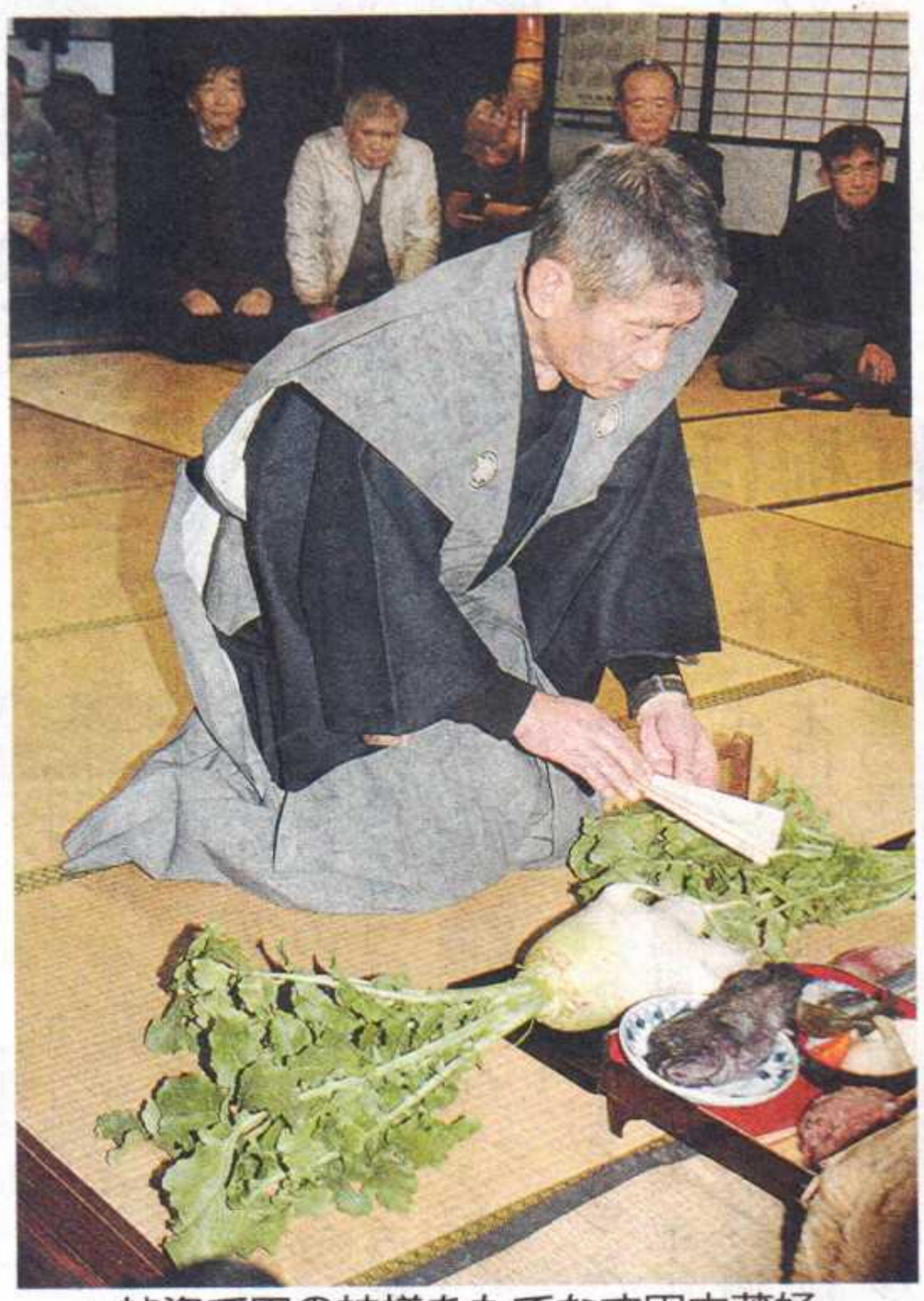
伝承されるあえのことだが、民俗学に詳しい同市飯田町の住職西山郷史さん（六九）は「あえのことは残っているが、農家の年中行事が次第に失われつつある。年中行事がしっかりしていることは、作物が実ってくれるという人間が生きていく上での原点。きちんとやっていかなければならないのだが」と警鐘を鳴らす。

さらに、奥能登の文化を継承する人たちが次第に高齢化し、次代を担う後継者育成が課題となっている。茂好さんは「だんだん人が少なくなってきている。何でもそうだが、やめるのは簡単だが、続けていくのは難しい」と実感している。

西山さんは「（あえのことは）儀式としてだけではなく、供えられたごちそう一つ一つにかかっている苦労に思いをはせる場でもある。次の世代に何を、どう伝えていくのかしっかりと考える必要がある」と提言する。

紙芝居の題材となり、市内全九小学校で公演もされた田中家のあえのこと。茂好さんは「代々やってきたので、これだけはやらなければという思いでいる。これからも変えることなく続けていきたい」と決意している。

田中さん宅では九日午後二時から、春のあえのことが行われる。



裃姿で田の神様をもてなす田中茂好さん＝昨年12月、珠洲市若山町で